

研究

佐伯氏の系図から

惟世と惟治の続き柄について

林 寅 喜

(会員 佐伯市中の島町)

佐伯地方に残っている文献や史書その他に集録された佐伯氏の系図を見る限りでは、十代惟治は九代惟世の第三子(北浦町尾高地神社の案内版にも三男と書いてある)となっているが、私はこれにはいささか疑問を抱いていた。

そこでこの謎を解くため二人の生涯から動かし難い物の証拠と、関係した史実に基づき、年表を添付して具体的に説明して見たい。

(一)はじめに惟世について

延岡市熊野江の浦尻神社神職方に、惟世が寄進したと

いう鰐口(たぐ)(延岡市指定文化財)が保存されていて、それは左のように刻んである。

佐伯庄寶光寺鎮守奉施人金鑿

満天宮(但しこれは横書き)

應永廿一年甲午十月八日讚岐守大神惟世



この鰐口がなぜ佐伯でなくて延岡にあるのかと言った疑問はさて置き、寄進された應永廿一年(一四一四)に惟世は何歳であったかということが、本文の謎を解く鍵となる。



鰐口には讚岐守大神惟世と官名までついているから、全くの童児ではなく元服後であったと思われる、少なく共十四、五歳にはなつていたろう。或はもつと上の二十歳前後だったかも知れない。佐伯市史によれば、惟世はこの時から二十七年後の堅田合戦(註)の時、既に壮年期であったと伝えているから、寄進時が十五歳なら四十二歳、二十歳なら四十七歳で、当時としては壮年期というよりもむしろ老境に近い年代である。

註 嘉吉元年(二四四二)八月、中国十六ヶ国の軍勢が佐伯氏の居城堅田宇山城に押し寄せたが、惟世は軍略をもつてこれを撃退した。

(二) 惟治について

惟治は大永七年(二五二七)日向尾高知おたかちで自刃した時三十三歳(行年)であったと、どの系図にも書いてあるから、逆算すれば明應四年(一四九五)生まれとなる。そこで前頁の年表を見て頂くとお分かりのように、惟世が寶光寺に鰐口を寄進した年から惟治が生まれたとする明應四年まで、実に八十一年の開きがある。これに惟世が鰐口を寄進した年までの年齢十五歳乃至二十歳を加算する

と、少なく共九十六年から百年を越える開きとなるので、どう推理して見ても親子説は成り立たえない。

しかし、系図に間違いはなく事実であるとするならば、惟世は九十歳を過ぎてまで豊饒かしくぐとして子まで儲けたばかりか、百歳以上も生きたという精力絶倫ぜつりんの不老長寿であったことになるが、そんなことは有り得るはずもない。

佐伯市史によれば惟治が生まれた明應四年ごろ、惟世は七十歳以上の老齡であったとしているが、鰐口寄進前の年数を考慮しなければそれよかつたかも知れぬ。

一説によれば惟治は自刃した時初老であったともいうが、仮りに五十歳としても惟世に取つては優に七十歳を越した子供となるので、前述に補足すれば平均寿命が今日とは比較にならない位短かつた時代ということから考えても、親子説は成り立たないばかりか、当時九歳であったとする千代鶴が惟治の子というものも不自然となる。やはりここは系図にいう三十三歳説が妥当ではないだろうか。

もし初老説が事実であるとするならば、一片の起請きしょう文(註)や甘言かんげんなどに惑わされて容易たやすく城を捨てたりせ

ず、もつと老獺ろうたかに立ち回り、例えば剃髮ていはつして塾居ちつきんじん謹慎と

か家督を譲るとかいった、別の方策を取つたに違いない。

註 起請文Ⅱ現在から将来にわたつて、自分の言動に虚

偽ぎのないことを神仏の名を借りて相手方に誓約せいやくした

文書。もし違約すれば神仏の罰を受けると書いてあ

り、平安末期に寺院関係ではじまり、中世では神仏

への信仰心の厚い世相を反映して、武家や莊園しょうえんの

間で広く行われていた。

現代新百科事典

余談になるが十月の初め「佐伯梅峯記」という稗史はいし

(歴史風の小説)の写本(コピー)を入手した。内容は「梅

牟礼実録」と大差はないが、こちらは短編でB4版にし

て三十枚である。書き写したのは黒沢村の三代吉とい

当時十五歳の少年(成人後は弥平次と名乗り庄屋を勤め

た)で、天保十二年(一八四一)二月のことである。

これによると惟治の死は大永七年七月廿五日三十三歳

の時で、落城は六月であったと書いてある。

このように惟世と惟治の親子説には矛盾むじゆん点が多く否

定せざるを得ない。

では一体惟世の後を継いだのは誰かというと、史書に

も系図にも出ていないので今後の研究を待つとしながら

も、前述により惟治の親は外に誰かいたが城主の座には

就けず、その結果歴史の陰に隠れた空白の時代があつ

た。としか言いようがない。ただ、権力のためには親子

兄弟といえども殺戮さつりくし合つていた乱世(應仁の乱突入

へ一四六七)に在りながら、豊後佐伯氏の一族間では平

和な時代が続いていたと考えるべきで、それは惟世が死

んで惟治が成人するまでの三十年前後ではなかつたかと

私は思う。

矛盾と言えば波越常楽寺に鰐口を寄進した惟直もそう
である。銘文には

豊後州佐伯庄堅田村常楽寺之公用也

干時文安四丁卯閏二月廿八日願主惟直

と官名は刻んでいない。この鰐口は惟世の寄進から三

十三年後になるので、惟直老年の寄進と推察すれば、惟

世と同年代か少し若かつた程度ではないだろうか。「佐

伯氏一族の興亡」ではこれに該当する人物として、「初

代惟康の子惟益の系統を継いだ高畑氏かと考えられるが

確証はない」としている。

もつとも、惟直は初代惟康から数えて五代目であるの

に対し、惟世は九代目であるから、惟直も同じ九代か十代なら納得出来るが、五代では矛盾するとしか言いようがない。多分この系統にも三代か四代の隠れた人物がいたか、それ共違う系統の惟直なのか、その辺のところはよく分かっていない。

結論として中世以前の土着豪族の系図には、そのまま信ずる分けには行かない矛盾点が往々にしてあるということ、を、申し上げて結びとしたい。

◆『国別戦国大名城郭事典』

西ヶ谷恭弘編

平成十一年十二月十日刊 A5版 三六一頁

本書は戦国大名の城郭を、東北・関東・北陸・中部・東海・近畿・中国・四国・九州に分け、各国別に城郭の解説を簡潔にまとめたもの。編者が指摘しているが「事典という性格上、専門的な見解や学説の紹介はなるべく避けて、各戦国大名の最新の研究成果を踏えた概説にとどめ、居住の紹介と状況」について平易に記述して読んで読みやすい。九州地方は筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向国・大隅国・対馬国と、国ごとに記述し、城郭研究者で知られる小野英治氏(弥生町役場に勤務。弥生町文化財調査委

員。大分県中世城館発掘調査員。佐伯史談会・大分県地方史研究会に所属。日本城郭史学会評議員。)によってまとめられている。

例えば、「豊後国」については、豊後国大名大友氏の主要城郭分布図・高崎山城縄張図・大友氏略系図などを掲載し、平易かつ親しめる説明で、佐伯史談会員に一読を奨めたい。本書の巻末には、戦国時代地方別年表を掲載して便利。年表は十五世紀後半(一四六七・応仁の乱)から十六世紀後半までの約百年間を記したもので、中世から近世への移行期に位置する時代。発行所は東京堂出版、定価三八〇〇円。

(矢野)

国別戦国大名城郭事典

西ヶ谷恭弘編

